

# 「あまりにも見事にくり返す」： 災害とマイノリティ女性と複合差別

“Unbelievably Clearly Repeating”:  
Disaster, Minority Women, and Intersectionality

鄭 幸子

Haeng-ja CHUNG, Ph.D.

岡山大学全学教育・学生支援機構  
教育研究紀要  
第5号 2020年12月

「あまりにも見事にくり返す」：災害とマイノリティ女性と複合差別

ちよんへんじや  
鄭 幸子

“Unbelievably Clearly Repeating”: Disaster, Minority Women, and Intersectionality

Haeng-ja CHUNG, Ph.D.

キーワード：災害、ジェンダー、エスニシティ、複合差別、加勢

Keywords: Disaster, Gender, Ethnicity, Intersectionality, Assistance

## 要旨

東日本震災後、多くの人たちが被災地から他地域へ避難する中、芥川賞作家の柳美里<sup>ゆみり</sup>は福島に向かった。「居場所のない人に寄り添う物語」を紡ぎ出すだけでなく実践する柳は、水俣病患者に「加勢」した『苦海浄土 わが水俣病』の著者である石牟礼道子に連なる。本稿では柳の行動を理解する手がかりとして、在日コリアン女性という属性に注目する。マイノリティ女性としての様々な経験は「人間を大きくし」「強くしなやかに生きていける」素地となったという人や日本人の理解者から支援を受けた経験から、もっと多くの人に在日のことを知ってほしいという声もある。一方で民族的マイノリティとして、また女性として複合差別の理不尽さを訴える声もあるので、本稿では複合差別の実態についても考察する。

## はじめに

見て見ぬふりをされたり忌避される側に「加勢」に行く人たちがいる。『苦海浄土 わが水俣病』(1969)の著者である石牟礼道子もその一人だ。水俣病の原因を糾弾し被害者の声に耳を傾け広く届ける活動をしてきた石牟礼道子は、受賞は辞退したものの、このデビュー作で大宅壮一ノンフィクション賞など二つの賞に選ばれている。46歳の時にはアジアのノーベル賞とも呼ばれるマグサイサイ賞を受賞し1973年、授賞式に参加するためフィリピンにも出かけた。1992年には長編小説の『十六夜橋』で第三回紫式部文学賞も受賞。活動のみならず文学的な才能も広く認められ、そしてその能力を理不尽に扱われた人たちのために活用してきた。

水俣病から半世紀後の2011年3月に起きた東日本大震災でも多くの被害が出た。原発事故により発令された原子力緊急事態宣言は未だに解除されていない。こうした中、被災地から避難や転出を強いられた人たちも多くいる一方で、逆に被災地へ「加勢」に出向いた人たちもいる。芥川賞をはじめとする多くの名のある賞を国内外で受賞してきた柳美里<sup>ゆみり</sup>もその一人だ。直近では『JR 上野駅公園口』が2020年11月にアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞を翻訳文学部門で受賞している。『JR 上野駅公園口』の主人公は、福島県相馬郡（現

在の南相馬市)の出身。1964年に開催された東京オリンピックの前年に出嫁ぎ労働者として上京した後、日本経済の浮沈に翻弄された挙句、家族も喪いホームレスになった男性である。

柳美里<sup>ゆみり</sup>は東日本大震災で原発から半径二十キロ圏内が「警戒区域」として立ち入り禁止になる前日の2011年4月21日に原発周辺地域に立ち入り、その後も定期的に通い続けた。翌2012年3月16日からは福島県南相馬市役所内にある臨時災害放送局「南相馬ひばりエフエム」で毎週金曜日「ふたりとひとり」という三十分のラジオ番組のパーソナリティも務めた。南相馬在住・南相馬出身・南相馬に縁がある、お「ふたり」を招いて対話した内容はアーカイブにされ今もインターネットで聴くことができる。<sup>i</sup> 南相馬市内にある仮設住宅の集会所を訪ねたり、話を聞きに出かけた柳美里が一貫して取り組んできたテーマは「居場所のない人に寄り添う」である。

関東から福島に自費で定期的に通い、地元の人たちの声に耳を傾け、より多くの人に届けるラジオ番組のMCを無償で務めていた柳美里<sup>ゆみり</sup>は、更に加勢するために関東の自宅を売り払い福島に居を移した。劇作家として岸田賞も受賞していた柳美里<sup>ゆみり</sup>は福島の人たちを巻き込み演劇活動も再開した。南相馬周辺から消えてしまった本屋を惜しみ、自らフルハウスという本屋を開き、人々が憩える場所が欲しいというリクエストに答えブックカフェまで併設した。

石牟礼道子と柳美里<sup>ゆみり</sup>は、想像力と創造力に裏打ちされた文学的才能を使って発信するだけでなく、最前線の現場でも加勢してきた。しかし、そのような精力的な活動の裏には一度ならず自殺未遂をしたという共通点もある。

「地方」として冷遇された福島も原発を誘致する前は出嫁ぎに行かなければ生計が成り立たない貧しい家庭が多かったという。石牟礼道子が地方や階層、学歴などによる複合差別ゆえに不条理に扱われた水俣病患者へ加勢したのは、女性として嫁としての不自由さや実家の没落などで低階層化を経験したことなど複合的困難を「人間を大きく」する素地にできたからかもしれない。柳美里も貧困を経験し高校中退者としての学歴差別、コリアンとして民族差別、女性として性差別という複合差別とは無縁でいらなかったと想像される背景から、「居場所のない人」のことを自分ごととして「寄り添う」ことを目指したのではないだろうか。

複合差別という理論化には、1989年にアメリカのクレンショーが書いた論文がその後の議論に大きな影響を与えた。日本では、「複合差別」(上野千鶴子 1996)、「重複差別」

(神原文子 2015)、「交錯」(河合優子 2016)といった用語があてられている。本稿では「複合差別」という用語を用いたが、英語の Intersectionality の翻訳としては「交錯」が最も近いと理解している。

複合差別という概念は近年注目されるようになったものの、まだまだ研究の蓄積が少ない。本稿では『【報告書】第2回在日コリアン女性実態調査～生きにくさについてのアンケート～2016年1~5月実施』から様々な声を拾いつつ、複合差別とは一体どのようなものなのか考察する。

### 在日コリアンコミュニティの性差別

「封建的」「男尊女卑」「男性優位」「男性中心」(アプロ 2018: 39, 40, 42, 44, 46, 47, 48, 49, 50)といった具合に多くの在日コリアン女性から、在日コリアンコミュニー内の根強い女性差別が指摘されている。例えば、在日コリアンの民族系の学校の女性教員は「教育者たちの意識」が低く「ジェンダー教育、性教育」も「LGBT に対する理解も不足」(アプロ 2018: 46)している内情を吐露している。学校だけでなく家庭環境でも幼い時から「父、夫、姑」などから「女性蔑視、軽視」を「刷り込まれ」、「自分も」例外ではないのではないかという危惧(アプロ 2018: 43, cf. 45)も聞かれた。学校や家庭以外にも、在日コリアンの「民族団体では常に女性差別を感じる」(アプロ 2018: 40)、「民族団体の上位役職に女性を見たことがない」(アプロ 2018: 54)といった具合に、「民族差別を許せないと言っている人が女性差別」(アプロ 2018: 49)をしているという指摘を、民族団体や学校、家庭、そして各個人は重く受け止め改善しなければならない。

民族差別を許せないと言っている人が女性差別をすれば「民族差別を許せない」と言う発言の説得力を削ぐだけでなく、民族差別解消への取り組みの矛盾や問題に気付きにくくなる。民族とジェンダーの複合差別を許せないと言っている人も、LGBTQ や障害者、貧困者への差別と無縁と言えるのか今一度振り返る必要があるだろう。差別の不条理を体験している当事者でも、自分の持つ特権や差別者としての自分には鈍感になってしまう危険性があることを私たちは肝に銘じなければならない。

また男性だけでなく、「女性差別に関しても、当事者である在日女性たちの認識の低さに怒り」(アプロ 2018: 43)を感じている在日コリアン女性もあり、「母親が息子を育てる時に差別を継承させ」「女が女を苦しめる悪循環」(アプロ 2018: 48)に加担していることもある。差別者の眼差しを無意識にうちに内面化してしまい、被差別者自ら差別を再生産し継続に加担してしまっている「女性による女性蔑視や女性嫌悪」。このように自らの属性に対する差別的な眼差しを無意識のうちに内面化してしまい再生産してしまっているのは性差別に限ったことではない。例えば、ホスト社会の排外主義を、メディアやマジョリティ(の眼差しや言動)を通して内面化してしまい、「自身の民族を蔑視し嫌悪」するという表れ方も残念ながらある。

### 在日コリアンコミュニティ内の(自)民族差別

民族コミュニティ内の民族差別は他の差別に比べると見過ごされがちだ。というのも自分の民族を自分で差別するという自己差別は、一見矛盾するように見えるからだ。しかし女性による女性差別があることを既に指摘した通り、また「自己嫌悪」という言葉もあるように、社会的に不利な立場に置かれている女性やマイノリティが自身(の属性)を嫌悪することはある。

筆者が行ったインタビューの中で、ある女性は小学生の時に日本人の上級生男子に「朝鮮人」と揶揄され石を投げられた経験があるが、揶揄する側に自分の兄がいたことを語ってくれた。日本社会に存在するヘイトスピーチや排外主義的な価値観に晒されることで、民族に対し



てネガティブなイメージを内面化し、同じ民族の他者（往々にして、女性や貧困者、低学歴、心身障がい者など不利な立場に置かれている相手）を侮辱することで、それが自分の妹や母親や祖母であっても、「自分はいつ（ら）とは違う」「自分の方がまし」「自分は例外」という思いと、マジョリティ側に媚びへつらったり擦り寄ることで受け入れてもらいたいという痛ましさを表れとも言える。後にも何度も出てくるように、外部の価値観の「内面化」は無意識に行われることが多いため、本人の自覚がないことも多い。

## 日本社会の民族差別

「グローバル化」と言いながら外国人を「差別」（アプロ 2018: 50）する矛盾は、例えば外国人だからという理由で賃貸物件への「入居拒否」（アプロ 2018: 50）をすることにも表れている。また日本社会の多文化化やダイバシティに貢献するはずの各種の「民族学校」や「民族学級」への教育差別（アプロ 2018: 50）は、グローバル化やそれに伴う多文化との共存を目指す方向性とは真逆のベクトルを指し示している。「グローバル化」とお題目を唱えお金や時間などの資源を注入しながら、グローバル化には避けて通れない多文化化やダイバシティに寄与している足下の外国人を差別したり何世代にも渡ってマイノリティが守ってきた民族学校の息の根を止めようとしている日本の現状を危惧する。日本では非常に「狭いダイバシティ」がまかり通っているが、そのような解釈は日本以外では通用しないのではないだろうか。

Diversity という英語は、性別だけでなく人種や民族、階層、宗教、出自などあらゆる属性に対しての多様性を標榜する。民族学校への政府による補助金カットやそんな政府の決定をサポートする最高裁判所は、グローバル化、ダイバシティ、そして2015年に国連で採択され日本を含む加盟国が取り組んでいるはずのSDGs（Sustainable Development Goal, 持続可能な開発目標）の中の「4、質の高い教育をみんなに」「5、ジェンダー平等を実現しよう」「10、人や国の不平等をなくそう」とも逆行する。

既に存在する多様性を邪険に扱い、グローバル化へとアクセルを踏んでいるはずが、国内に既に存在する多様性を排除するブレーキを踏むということでは、先に進めないだけでなく、多くの資源を無駄遣いする結果になってしまっている。二十世紀末から続く日本の衰退とも無関係ではなく、狭量さが自らの首を閉めている。

コリアン名で「学校に通う子どものことも心配」（アプロ 2018: 55）している親、そして大人にも「職場などで日本名」を使うよう「強要」（アプロ 2018: 45）すること一つとっても、民族の違いを許容できない不寛容さが滲み出ている。そうした土壌があるからこそ、「ヘイトスピーチ」が頻発しており、ターゲットにされた人たちを不愉快、不安にするだけでなく「自尊心」さえも傷付けている（アプロ 2018: 51）。

ヘイトスピーチは特殊な人たちだけがしていると目を背けるわけにはいかない。中流の中高年の日本人男性が占める割合の高さを、例えば社会学者の樋口がインタビューデータからあぶり出している（樋口 2014）。こうした排除や排外は民間レベルだけでなく、日本で生まれ育

ち何世代にも渡って日本社会に貢献し「税金」も払ってきているのに、教育差別を行い「選挙権」も与えない(アプロ 2018: 52)日本政府の態度にも現れている。

そしてこのような政府を支えているのは、日本人の「潜在的な差別意識」(アプロ 2018: 54)や、自国の帝国主義時代の「歴史を習わなかった日本人の狭い考え」(アプロ 2018: 55)からきているという声も聞かれた。前川前文部科学省次官自身が自戒を込めて「官製ヘイト」と呼ぶ所以だ。このような日本では、祖先が「朝鮮半島」から来たという「出自」を「オープンにして生きることは難しい」(アプロ 2018: 54)。多くの「在日」がコリアンであることを「隠しながら、または隠さねばならず、生きている」(アプロ 2018: 39)ことをご存知だろうか。このように出自を隠しながら生きていくことが、心身ともにどんなに負担がかかるかは、アフリカ系アメリカ人やユダヤ系アメリカ人が、アングロ系のアメリカ人の振りをするためにとらなければならなかった涙ぐましい経験とも連なる。

想像してみて欲しい。自分の属性(民族、ジェンダー、性的指向、職業、学歴、名前、障がい等)を隠しながら生きていく毎日が、いかにしんどいか。何世代も住んできている隣人なのに「日本人は、私たちの想像以上に何も知らない」(アプロ 2018: 51)と無念さも聞こえてきた。

関連書籍や映画など多数存在するので、個人個人が自ら手にとって見えにくい隣人についてもっと学び、日本の学校教育で学ぶ機会を作っていくことが必須だ。さもなければ、次世代も無知のまま大人になってしまう。グローバル化、ダイバシティ、SDGsの達成を目指すなら、ひとりひとりができることから始めなければならない。

## 日本社会の性差別

在日コリアンの職場や団体、学校、家庭だけでなく、「さまざまな場面で男性優位」「～長」は男性(アプロ 2018: 48)といった具合に、日本の社会でも「若くて経験も浅い男性」が「出世」し「意思決定」する不平等に直面し、女性が「意見すると、うるさいと」(アプロ 2018: 41)言われてしまうことが未だにまかり通っている。つまり「世界全体の女性に少なからず何らかの不利」(アプロ 2018: 47)がある。結果的に「女性であるというだけで明らかに生きづらい」という閉塞感は、石牟礼道子や柳美里を自殺未遂に追いやった原因とも無関係ではあるまい。

更に女性は「商品化され消費され」るだけでなく「商品化されることは当たり前という内面化」をしてしまっており(アプロ 2018: 46)、「女性」は「下、弱い等」のイメージがあるので「満員電車や夜道」で「怖くなる時が」(アプロ 2018: 46)あるという。こうした日常生活に蔓延する恐怖や自己卑下が心身に及ぼす影響ははかりしれない。

アカデミアも性差別から自由ではない。「会議やゼミや学会などで、女であるだけで発言をスルー」されたり、同じことを「日本人男性が言っ」た場合は聞いてもらえ評価までされるのに、女性が発言した時は「中断されることがある」。例えば、「慰安婦」が「話題になると

『正義の暴力』や『神々のお達し』と言って「冷笑される」(アプロ 2018: 40) 経験は、民族的にも性的にも繰り返し踏み躪られる複合差別の一つだ。

### 民族と性差による複合差別

上記で見てきたように、民族コミュニティ内の性差別、民族コミュニティ内の民族差別、日本社会での民族差別、そして日本社会での性差別が交差し、からまりあったものが複合差別である。民族と性差による複合差別を「在日男性が感じている不利？生きづらさ？の上に、女性としての不利？生きづらさ？が追加」(アプロ 2018: 39)されたものと形容し複合的不利益を語る女性がいる。そして「民族、女性と二重の差別」と説明してもなかなかわかってもらえないという嘆きも(アプロ 2018: 41)現れているように、理解してもらえないという更なる苦しみ折り重なる。

分かり難さの原因は、民族コミュニティ内の性差別、民族コミュニティ内の民族差別、日本社会での民族差別、そして日本社会での性差別というように、二つ以上の要因が複雑にからまり合っているからである。今後、ジェンダー研究にせよ、エスニックスタディーズにせよ、この交差や絡まりを解きほぐしながら分析し解決策を探る必要がある。

類いまれな努力と能力により複合差別を乗り越え、賃貸住宅に入居したり就職できたとしてもそこで問題が解決するわけではない。前にも出てきた通り、家の表札や職場で日本名を強要されるような同化圧力があり、次なる差別が姿を現す。

また大人の生活の重要な要素である仕事に関しては、在日コリアン女性の完全失業率は女性全体の平均値より 4.1 ポイント高く、非正規雇用率は 7.8 ポイントも高い。在日コリアン男性と比較しても、完全失業率は 3.5 ポイント高く、非正規雇用率に至っては 35.1 ポイントも高いという結果が出ている(アプロ 2018)。日本人男性より不利な立場に置かれている「日本人女性と比べて」も、給料が安く設定され(アプロ 2018: 43)不安定雇用が多い在日コリアン女性は、「経済的に困窮」(アプロ 2018: 44)している人が多い。政府が補助金を打ち切っている民族学校へ通わせている場合は、教育費が更なる経済的負担としてのしかかってくる。複合差別のしわ寄せは在日コリアン女性の非正規職員の年収にも顕著に現れており、日本人女性の非正規職員の約半分の年収という報告もある(アプロ 2018: 66)。

家庭でも「在日コリアン女性が日本人男性と結婚した場合」多くが「子どもの教育」「国籍」など日本人「男性側の選択を優先」(アプロ 2018: 39)することになる。そしてこうした「理不尽な差別に苦しむことを、生まれながらに継続的にならされて」「最初から自身の可能性ややる気」が削がれてしまっている(アプロ 2018: 39)ことは、日本社会にとっても損失だ。

こうした複合差別はアカデミズムや大学も無縁ではない。「朝鮮人女性と」表明するだけで「ファイティング・ポーズ」を取っていると思われてしまう(アプロ 2018: 40)と感じる女性もいる。出自を隠すように誘導する同化圧力が真理を追求すべきアカデミアにさえ存在していることを、アカデミアにいる人間はもっと深刻に受け止めなければならない。そして教員や研究

者でさえ、そのように感じる環境は、マイノリティ学生、特にマイノリティの女子学生にとって、更に強い同化圧力と感じられたとしてもマイノリティを責めるのはお門違いだろう。

女性として軽んじられる上に民族的な差別が加わり、「社会科学的な発言も『極端な人』ととられる」(アプロ 2018: 40~41)状況では、研究や教育に障害も多く支障が出たとしてもおかしくない。慰安婦に関する研究を軽んじられた経験が前に語られたが、不平等に関する研究や教育をすれば、風当たりが強い経験をしているマイノリティ女性教員は彼女一人ではない。

### サバイバーとして

こんな理不尽な状況に置かれながらも、「在日に生まれてよかった」と語り、マイノリティーとしての様々な経験は「人間を大きくしてくれ」「強くしなやかに生きていける」と語る在日コリアン女性もいる(アプロ 2018: 54)。しかし逆境をバネに「強くしなやかに生きていける」在日コリアン女性がいるからと言って、全てのマイノリティにこうした類い稀な強さや才能を求めることはできない。

また在日コリアンのことを知らない人が多いのもっと知って欲しいという思いも表明された。ある在日コリアン女性は日本人について「在日の存在を知った方は私たちに協力をしてくださり、理解し、手をさしのべて下さるからです」と発言をしている。そして「特に幼いころから私たちの存在を知ってもらうことが大切です」とも続けている。(アプロ 2018: 51)

「夫の仕事の都合で日本国籍」を取得した在日コリアン女性は、コリアン名の「本名で生活し」ており「出自を明らかに」することで「精神的に楽になったし、本名で名前を呼ばれるのが嬉しい」と語っている(アプロ 2018: 56)。もっと多くの人たちが「出自を明らかに」して「精神的に楽に」生きていける社会は、マジョリティにとっても生きやすい社会に違いない。

### むすび

『【報告書】第2回在日コリアン女性実態調査～生きにくさについてのアンケート～ 2016年1~5月実施』(アプロ 2018)で明らかにされた、民族的マイノリティ差別やジェンダー差別、あるいは両者が交差する複合差別を経験した在日コリアン女性たちの声を中心に考察してきたが、最後に日本人女性の声を紹介したい。韓国籍の在日コリアンと結婚した日本国籍の日本人女性は「在日が多い地域で育」ち、在日コリアンがコリアンの「名前でからかわれていたり」していたのは知っていたが、彼女自身も「名前でからかわれたりしたので、同じと感じていた」。しかし、夫に選挙権がないことで「日本からの差別」があることを実感。朝鮮名をからかわれることを、植民地時代の創氏改名の歴史的経緯、排外主義的な社会状況と合わせて考えれば、日本名をからかわれることと同列に考えてはいけないことに気づいたようだ。そして「子どもたちは日本国籍」だが、「歴史の上で日本人が韓国人にしてきた事はとうてい許されるはずはない」。日本の学校ではそうした歴史を学べる機会が皆無なので、自分たちで「子ど

もたちに歴史を教え」ていくことが「大事だと言うことを言っていきたい」と語っていた。

(アプロ 2018: 58)

水俣病患者とともに公害運動に関わった石牟礼道子は、数十年前の足尾銅山公害にも思いを馳せ、調べていくうちに「あまりにも見事にくり返すんだなあと思ひましてため息が出ます」と語っている（米本 2020: 189-192）。ある地域や人々に社会の矛盾を押し付ける（例えば、長距離の電気輸送は効率が悪いにも関わらず、東京を原発の危険から遠ざけるために福島に原子力発電所を作って東京に電力を供給する）ことが、東日本大震災によって再び明らかにされ、またしても「見事にくり返」していることを見て見ぬふりをしてしまっ<sup>ゆみり</sup>てはいけ<sup>り</sup>ない。柳美里も、見て見ぬふりをしては作家として書けなくなってしまうと危惧して加勢に注力している。複合差別を他人事とは思わない感性と行動が、マジョリティの側の「人間」も「大きくしてくれ」「強くしなやかに生きていける」きっかけを与えてくれるのではないかという問いかけと共に本稿を締めくくりたい。

参考文献

アプロ・未来を創造する在日コリアン女性ネットワーク 2018 『【報告書】第2回在日コリアン女性実態調査～生きにくさについてのアンケート～ 2016年1～5月実施』

上野千鶴子 1996 「複合差別論」（岩波講座現代社会学 15『差別と共生の社会学』） 岩波書店

河合優子 2016 「序章 多文化社会と異文化コミュニケーションを捉える視点としての『交錯』」（『交錯する多文化社会—異文化コミュニケーションを捉え直す』） ナカニシヤ出版

神原文子 2015 「重複差別—被差別部落の子づれシングル女性の場合」（『現代社会研究』創刊号 74-91）

Crenshaw, K., 1989, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Anti-Discrimination Doctrine, Feminist Theory and Anti-Racist Politics,” The University of Chicago Legal Forum 140:Vol. Article 8.

樋口直人 2014 『日本型排外主義～在特会、外国人参政権、東アジア地政学』 名古屋大学出版

柳美里 2014 『JR 上野駅公園口』 河出書房

米本浩二 2020 『評伝 石牟礼道子～渚に立つひと』 新潮社

---

<sup>i</sup> <https://odaka-fullhouse.jp/2019/07/26/post-3674/> (last accessed on 12/16/20)